

◆ 県外視察

千葉県遊漁船業視察

甲斐哲也

1 日時：

平成18年12月6日（水）～12月9日（土）

2 場所：千葉県

3 目的：宮古島・伊良部漁協所属遊漁船業者の先進地視察随行

4 同行者：伊良波淳世（伊良部漁協指導漁業士）、下里猛（伊良部漁協参事）、渡真利武（宮古島漁協パヤオ生産部会長）

5 内容：宮古島市・（財）博愛国際交流センターによる平成18年度体験滞在交流促進事業の一環として、宮古圏域の遊漁船業者らが千葉県内の遊漁船（釣り船）に体験乗船し、今後の観光漁業の質向上に寄与する。

●12月6日（水）

参加者は、この日早朝から銚子市海^{かい}匠^{そう}漁協での遊漁船体験乗船に参加し、フグ船でショウサイフグを多数釣り上げた（甲斐は夕方合流）。



夜明けのショウサイフグ釣り。気温は5℃。

（参加者の意見・感想等）

- ・釣客に真心を持って対応サービスをしている。
- ・宮古島における乗合船大型化、トイレ、休憩設備の充実、遊漁中に座れるイス等を整備する事が必要と感じた。
- ・宮古での乗合船に向いている魚種は小型魚がよい。例えばグルクン、タマン類を浅場でやる。水深が深いと糸の絡みが多く発生するので、マ

チ類は客と客の間を広く取ると良い。パヤオのカツオ、マグロは魚体の大きさや引きの強さがあり、人数が多いと大ケガをする恐れがあるので、なるべく少人数の仕立式（現状）が良い。
・宮古島は人口が少ないので、観光客相手だけで設備投資出来るか。夏は台風、冬は北風のシケが多いので船宿が出来るか。乗合船は乗船前に、氏名、住所を栈橋で書き、料金を払う。漁協に手数料が発生する場合は、その名簿を元に払う。手数料は一人200～300円位を目安に漁協と話し合う。



海匠漁協会議室にて、遊漁船主ら（漁協理事守部幸一氏、向後嗣一氏ほか遊漁船長ら総勢9名）と意見交換

飯岡遊漁船組合は、10経営体で遊漁船25隻、年間約2～4万人の利用者がある。客は千葉、東京周辺から来る。毎日インターネットでその日の釣果を更新する。組合発足は20年前5～6軒で漁業をしながら始めたが漁獲が減少し、今は遊漁しかしない。遊漁手数料は一人200円で毎月自己申告で漁協に納める。毎年6月に釣り大会を行い、300名程が参加する。料金は乗船料プラス参加料、釣り新聞にも広告する。遊漁料金は飯岡遊漁船組合は統一なので、自船が満員になったら空いている船へ行ってもらおう。
・3月に同じ事業で視察した神奈川の二つの遊漁船でも、客層は関東一円で、客に対してはイン

ターネットでの情報提供・広告が一番効果を上げていた。また千葉県内、神奈川など他地域との競争があるものの、大都会の強みで客数は宮古とは桁違いである。宮古での遊漁船業は、漁業との兼業で、主に本土からの観光客を対象としており、一部の業者はインターネット広告も行っているが、上野のようにリゾートホテルから紹介を受けて船を出すというケースもある。専門化を実現するには、それなりの需要が増えないと厳しく、またそのためにも、ただ客が来たから釣らせる、だけではなく、漁船の接客装備、きめ細かいサービスなどが求められる。

●12月7日(木)



銚子マリーナ白石常務取締役支配人と意見交換

銚子マリーナは、平成11年から銚子市とヤママー、ヤマハなどが出資して営業する第3セクターで、白石氏と歴代常務はヤマハから出向している。毎年、関東一円から参加者が集まるカジキ釣り大会を毎年6月に開催している。今年は8回目でこれまで天候等で2回中止した。大会参加者は自艇を乗り付ける関東一円の富裕層で北は福島、南は湘南から参加する。銚子沖はカジキが良く捕れる所で毎年20~30隻が参加する。

スタートは朝7時頃で、同じ時間帯に、後述の外川漁港キンメ釣り船が入港するので事故が起きないように参加艇は全船、南へまっすぐ20海里程走る。大会の優勝艇には楯が贈られる。銚子マリーナのカジキ釣り大会は地元の人あまりこない。銚子では他にイベント(後述の魚祭り等)が沢山あるのでそこへ行く。他の釣り大会は地元のマリンフェスティバルの中で行政

とタイアップしているらしいので、銚子でも、このようにしたい。来年の大会からシリーズ化して、大洗、大船渡、塩釜、小名浜と参加艇が自港に戻らず各大会を転戦できるように開催時期を少しずらしたいと考えている。大会ルールはJGFAのルールを適用。昨年くらいから市の予算がほとんどないので、資金は、参加艇一隻30,000円、クルー10,000円×乗員数、マリーナ使用料5,000円その他、寄付金のほか、大会パンフレットの広告料、小サイズ10,000円~、などで合計250~300万位を集める。表彰式は地元のホテル等で行う。

・この釣り大会は、地元住民は蚊帳の外、参加者はクルーザー所有の富裕層であり、参加者が滞在する間、地元への経済効果が多少あるが、宿泊などは(マリーナ周辺には、我々も利用した小さな民宿・船宿があるが)自船に泊まったりすると、食事などもコンビニやスーパーを使ったりという場合がほとんどらしい。宮古で想定している釣り大会は、現在ある地元仕立て漁船利用型(久米島型)であるので、銚子の釣り大会とはかなり方向性が違っていた。銚子型のように、沖縄本島などからクルーザーを乗り付けてくる参加者はそう集められるものではないだろう。



銚子市漁協外川支所辻勝美課長と意見交換

外川支所の前身は外川漁協。銚子漁協合併により支所となった。現在、キンメダイのブランド産地となっている。船は午前2~3時頃出港して朝7頃には戻る。その日のうちに魚を出荷する

ので外川港のキンメダイは鮮度が良い。日曜日は出漁せずに全船が休む。もし休みの日に魚を捕ると翌日の出荷になり、鮮度が落ちブランド化が出来ない。マリーナの釣り大会が地元住民不在なのに対し、こちらは地元で年に一回魚祭りを漁業者主体で開催し、約40万人が訪れる。祭りに合わせて魚を2~3日前から取り集めておく。漁協は寄付をするだけ、組合員の年間水揚高は1,200万円位で安定しており、後継者不足という問題はない。

・キンメダイのブランド化を進めるために、地域の各漁協・漁業者が一丸となって取り組んだ好例であると言える。特に休漁日の設定などは鮮度保持、資源管理という両点からも見習いたいところである。ただ組合員のほぼすべてがキンメダイを漁獲する、というような漁協組織ではないことから、宮古地区の漁協では、パヤオ部会、もずく生産部会などのグループ単位での取り組みはさかんに行われているものの、宮古3漁協での取り組み、というような地域ブランド作りは、対象種、方法ともに未定である。

●12月8日(金)

午前3時過ぎに築地中央卸売市場に到着、場内を歩くこと5分ほどで太物を扱う競場に到着し、大都水産の競り場担当者から、入場証を貸



築地中央卸売市場生マグロ太物競り見学

与され、並べられているマグロを見た。青森

大間産、対島産など国内天然物やメキシコ、ギリシャ等の養殖物のクロマグロ（本マグロ）ばかりで、最大のマグロは大間産の270kgで、16kgの外国産までであった。競り値は1,200~4千円程度であった。

・3月の京都、徳島の市場にも外国産の養殖生マグロは多数出ている。ただしクロマグロではなくキハダ。養殖は近畿大学以外は畜養なので、巻き網による大量捕獲が問題視され、クロマグロとミナミマグロの漁獲制限が行われる一因にもなっているようだ。



(株) 中央魚類との意見交換

朝食を宿でとってから再度中央卸売市場に向かい、午前9時に中央魚類会議室で難波勝昭理事、木村義美課長、鋤持昌香係長、山本享氏らと意見交換。現在マグロの入荷は少なくなっているが外国産の養殖物が増え、脂が多い白身中心になっている。今後天然物の赤身が値が上がる。キハダでも形が大きく赤黒い色の脂がのった物は、良い値が付く。南方のキハダは相対売りしているが、たまに来る物より定期的に来ると値段も良いので、沖縄からも送ってほしいとの事。但し安定供給が条件で、安定しなければ値段はつかないとのこと。徳島・京都では評判の良かった沖縄産「赤身」のことを訊ねると、確かに色は良いのだが日持ちしないので評価は今ひとつと言われた。この点については、今後試験出荷を行い、現行ヤケ対策等の鮮度保持処理後のマグロがどう評価されるのか検証してみる必要があるだろう。